

# ケベックのとりべき道

——クレチヤン蔵相の講演から

ジャン・クレチヤン大蔵大臣は、一月末、モントリオールにあるケベック州経済人協議会で「ケベックとカナダの選択」と題する講演を行った。大臣はまず、現在の基準で過去の政策や失敗を論じることをいましめたあと、要旨次のように述べた。

連邦主義が独立かという問題に関する州民投票を前にして、選択すべき道を明確に定義する必要がある。(中略)経済的、社会的見地から言って、連邦主義がもたらす主な利点は、広大かつ統合された国の存在と関係する。きわめて多様な資源が一つの広大な手にあるということとは、われわれすべてにとつて間違いなく安心かつ安定の要因となる。孤立した単一市場より、大規模で多様な市場の方が、いろいろな分野でより分業的かつより効率的な生産が可能となる。生産の効率化により、資源や生産要素の配分も合理化される。さらに経済単位が大きく、また強ければ、対外交渉における立場も強化され、貿易の機会も増大するし、それだけ大きく、安定した準備資金も調達できる。また連邦体制においては、税収の再分配によって、州間および個人間の格差は正も図られる。

連邦制度は諸地域の利害を調整するため、いろいろな協議や交渉が必要となる。当事者の要求がすべて満たされない場合は、不満も生じる。しかし、こうしたトリード・オフの問題は、単一国家にもあることだ。

連邦制度の真髄を把握するには、経済的な損得だけでなく、その他の要因も考慮に入れる必要がある。カナダ連邦にお

ける個人の自由は他のいかなる先進国と比べても劣らない。それどころか、場合によっては、勝ってさえいる。

他方、ケベック政府が主張する「主権・連合」という考えほどあいまいなものはない。この二つの言葉は補完的ではなく、むしろ矛盾する言葉だ。「主権」を強調すれば、「連合」は全く意味を失うし、「連合」を強調すると、「主権」の意味を失う。主権を主張するのは、要するに独立を云々することであり、「連合」を主張すれば連邦制を受入れたことになる。

主権・連合の概念を評価するには、まずケベック州政府が、「主権」や「連合」というのはどういうことか、明確にするべきだ。その説明がないと、知識に基づいた選択は不可能だ。どういう変更がなされるか、結果がどうなるか、誰も知らない。

しかも、例えケベック党が独立を約束できて、また州民の承認を得たとしても、連合を約束することはできない。提案はできて、それを受入れるか拒絶するかはケベック以外の州が決めることだ。ケベック党によれば、ケベックと他の州は互いに持ちつ持たれつの関係にあるので、「連合」が拒否されることはない主張しているが、ケベックの製品のうち半分以上は州内で消費され、一五パーセントは外国へ、三〇パーセントは国内各地(オンタリオ州だけで二〇パーセント)へ輸出されている。ケベックが分離して他州が経済連合を受入れない場合、ケベックは製品市場のおよそ三分の一に対する自由なアクセスを失うことになる。一方、他州の製品輸出にケベックが占める

割合は、オンタリオ州が一パーセント、大西洋諸州が九パーセント、大平原諸州が六パーセント、ブリティッシュ・コロンビア州にいたっては二パーセント以下に過ぎない。しかも、ケベックが州外の国内市場に輸出している製品の半分は関税で保護されているもので、他州としては海外で買った方がずっと安くつく。おまけに、例え独立できたとしても、制度上の移行には相当の金がかかる。

ケベックは連邦から脱退することによってその経済的、社会的、文化的向上を図るチャンスが高めるだろうか。また政治的独立によって、その経済的、社会的諸問題をより効果的に解決できるだろうか。これに対する私の答えは、はっきりとノーである。

## ● 書評 ● ピーター・デバラ著 「ルネ・レベック」 ケベック独立を目指して」

(Reine: A Canadian in Search of a Country)

一九六三年五月十六日の晩、ジャラード・ペレチエの家に当時「五賢人」と呼ばれていた人たちが集まった。ケベックの自主性をうたった「静かな革命」はいくらか落着きを見せていた。過激的な若者たちは、今だに英国系カナダ人街で郵便受けに爆発物を仕掛けたりしていたが……。

この日集まったのは、ケベック州政府の天然資源大臣レベック、モントリオール大学の法学部教授トルドー、「ラ・プレス紙」の編集長ペレチエ、CBC(公営放送局)に対するフランス語テレビ・プロデューサーの六十三日間ストを指揮

した労働組合の指導者ジャン・マーシャン、それにアンドレ・ローレンドーという、いずれも平和的改革を主張する人々で、彼らは一九六一年以来こうした会合をもっていた。特に決まった議題とか順序というものはなく、いろいろな問題を取り上げては、議論するという風だった。

その夜は、「一言語・二文化審議会」の設置を提案し、のち、その共同委員長になったローレンドーが、威信の上で一頭地を抜いていた。しかし大学生のような熱心さでいろいろなアイデアをだし、議論を引っぱっていったのは、レベックであった。レベックは四〇才になっていたが、それよりは老けてみえた。トルドーはほとんど発言しなかった。しかしときどき口をはさむときは、痛烈なコメントでレベックの饒舌を絶ち切ることが多かった。

ローレンドーは間もなく死亡するが、他の四人のうち、トルドーはカナダの首相として連邦主義の領袖となり、ペレチエとマーシャンを閣僚にした。レベックは自由党と訣別し、ケベック党を結成してケベック分離の牽引車となる……。

本書は、これら「五賢人」の人物や活躍を生き生きと描きつつ、連邦主義者と分離主義者の動きなど、近代カナダの息吹きを伝えてくれる。

レベック自身や彼の考え方に詳しくない読者には、まずジャン・プロベンシャールの Rene Levesque: Portrait of a Quebecois (ルネ・レベック——あるケベック人の肖像)をお勧めしたい。レベックの家族や子供時代のこと、ケベックにおける政治、レベックの言行などが、この本にはより詳しく書かれている。